

親子漫才

東京都世田谷区 磯部 輝昭

朝六時十五分、渡辺一希は自分の部屋で目覚めた。実家に戻ってきた当初は、この部屋で目覚める度に違和感があったのだが、一ヶ月ほど経過した今では、もうそんな感じはしない。一希の実家は千葉県市原市にあり、大学二年の終わり頃までこの実家で父と母と三人で暮らしていた。二十歳になったのを機に、東京都内の通っている大学により近い場所にアパートを借り一人暮らしを始めたわけだ。その後大学を卒業し、就職をし、結婚し、一人目の子どもが生まれる頃、東京の世田谷区に三十五年ローンでマンションを購入した。

「カズ、マンションの売却は順調なのか」

一階のリビングへ下りていくと、新聞を読んでいた父・道雄が声をかけてきた。七十五歳、十年前に仕事を辞めて、趣味の釣りを楽しみながらのんびりと年金生活を送っている。

「うん。今週中に契約書を交わして、それから一週間くらいで入金されるらしい」

「すぐに処理できて良かったね。値段も悪くないでしょ」

朝食の味噌汁を作っていた母・晴恵がキッチンから顔だけ出して会話に混ざってきた。昔からおしゃべり好きだった晴恵は、七十三歳になってもあまり変わらない。体力は衰えてきているよ

うだが。

「うん。買った時の一・三倍くらい金額になったよ」

四十八歳になった一希は、十五年間住んだマンションを売却することになった。理由は正式に離婚が決まったからだ。そしてマンションを売りに出した今から一ヶ月前、実家に戻ってきて三人暮らしが再開したという次第だ。それにしても素早く、良い値段で売れて運が良かった。

「で、子どもには自由に会えるのか」

「一ヶ月に一回会っていいってなっているけど、もうちょっと落ち着くまであまり考えたくないな」

道雄のこの質問はもう五回目くらいになる。答えるのも面倒だという雰囲気で一希は返答した。親権者は母親となった。離婚の原因が、一希の浪費、飲酒、ギャンブル、家事育児に非協力的な姿勢、などだったことから当然と言えば当然だと本人も感じている。ただ妻と…正確には元妻と離婚について真剣に話すようになるまで、自身の短所に全く気付いていなかった。違う言い方をすると、元妻の不満に気づかないくらい鈍感だったのだ。その鈍感さが一番の短所だったのかもしれない。十五歳の長女、十二歳の長男も自分に対して不満があったのだろうか…なんてことを考えると流石に気分が減入ってしまう。

「じゃ、いただきますよるか」

晴恵の明るい声が、一希の暗い気持ちを和らげてくれた。テーブルの上に簡単な朝食が準備され、穏やかな朝食タイムとなる。一人っ子だった一希は、三十年前も今と同じように三人でテーブ

ルを囲んでいたはずだ。その時どんなことを話したり、感じたりしていたのか、あまり記憶がない。晴恵は、今日の味噌汁の具についてとか、昨夜の残りの温めがイマイチとか、最近お気に入りふりかけとか、朝食にまつわるあれこれを楽しそうに話している。道雄はそれらに特に反応せず、黙々と朝食を摂取するための行動に専念している。時折、午後から雨の予報だぞとか、土曜買い物に行く時に下着も買うのだなとか、事務的なことを話す。一希と一緒に生活するようになる前、つまり一ヶ月以上前は、この二人だけで会話は成立していたのだろうか。一希は自身の幼少期を振り返ってみても、晴恵と道雄の会話が盛り上がっていたシーンを想像できない。離婚してしまった一希の食卓の雰囲気は、傍から見たらどんな感じだったのだろうか。実家に戻ったことで改めてそんなことを考えてしまう。しかし、特に深刻に考えることもなく、晴恵のおしゃべりに適度に相槌を打ち、道雄の突然の話題に無難な返答をしているうちに朝食を食べ終えた。

「ごちそう様。じゃ、仕事行っちゃいます」

「今日は帰り遅いの、早いのに」

「ま、いつも通りかな」

「はい、行っちゃい」

一希は朝の通勤電車で揺られながら、この一ヶ月間の生活を振り返ってみた。掃除も洗濯も食事もとにかく晴恵がやってくれている。かつては元妻がほぼやってくれていたもので、一希にとってあまり変化はないはずなのだが、何かが違う。晴恵の家事は楽し

くて仕方ないという雰囲気^{おふ}に溢れている。新たな役割が出来たとも言わんばかりに澁刺^{はっさ}としている。我が子の世話をする事で、まるで三十年前、四十年前の自分に戻ったような感覚なのだろうか。とにかく一希に対して至れり尽くせりだ。そう言えば、昔から道雄は家事全般を晴恵に頼りつきりだった。お茶を淹^いれることすらできないのではないだろうか。そんな道雄も買い物や晴恵の通院の際には車を出したり、電化製品や家具の簡単なメンテナンスをしたり、物置の大きな荷物等の整頓をしたり、父としての役割を少しながら担っている。そのため一希は、実家においてやる事が全くないのだ。いやいや、本来役割なんて自分で見つけて行動していくものなのだが、そういう思考回路にならないところが、一希の受動的な性格の特徴なのだろう。離婚前は積極的とはいかないまでも子どもたちの遊び相手、相談相手となることも多かったが、今ではそれも全くなかった。

「やることなくて楽なんだよなあ」

自分自身に小さな声で呟^{つぶや}いてみた。言葉にすることによって自身の耳にも聞こえてきて驚く。とてもじゃないが四十八歳の大人のセリフと思えなかった。一希は急激にあせりを感じた。マンションの売却など離婚にまつわる事務的なことも一段落した今、せめて自分のやりたいことに没頭しよう。やりたいことに時間と労力を費やそう。そうしないと実家でボーッと暮らしているバツイチの冴えない中年じゃないか。

ところで、やりたいことって何だっけ。改めて考えると夢中になれる趣味なんて持っていない。かつて好きだったことを思い出

してみる。プラモデル、サッカー、から揚げ、競馬、カクテル、温泉……一つずつ頭の中に描いていった時、突然目の前がパッと開けたような感覚になった。

「コメディをやりたい」

ステージに立って、観客から喝采^{かつさい}を浴びている自分を想像したら無性にワクワクしたのだ。とは言え一希は、人前で芸と言えるようなモノを披露した経験なんて一度もない。コメディに関する知識も特にない。ただ、大学生の頃、コメディアンは格好いいと猛烈に感じている時期があった。きっかけは『キング・オブ・コメディ』というマーティン・スコセッシ監督の映画だ。根暗でアブナイ性格の主人公がコメディアンを目指して、一世一代のステージに上がるというストーリーだった。その痛快さに刺激を受け、その後レンタルビデオ屋で『サタデー・ナイト・ライブ』というアメリカのコメディ番組を借りまくった。当意^{とういどう}即妙^{そくめう}なトーク、知性を感じさせる数々のネタ、堂々としたパフォーマンス、一希のイメージするコメディとは、スタンダップコメディだった。ところでコメディをやるってどういうことだろう。少し考えた後、第一にネタを作る、第二にリーグランプリに出場する、ということを目標としてみた。

それからの一希は、暇な時間にいわゆるジョークを作りまくった。思いつく度にスマホのメモ機能にそれらを蓄積していった。面白いかどうかは後で判断するとして、まずはたくさんジョークを用意しておくことが肝心だと考えたのだ。二週間ほど経って

ジョークの数も増えてきた時、誰かに試してみようと思った。職場での一希は大人しいため、突然ジョークなんて言い出したら周囲の人が困惑してしまいそうだ。離婚でおかしくなったなんて思われたらそれこそ目も当てられない。まずは家族だな。家族相手なら、うまく話せなくても恥ずかしくないし練習にもってこいかもしれない。そう思った日曜の昼、リビングでコーヒを飲んで暇そうにしている道雄を見かけた。

「父さん、ちょっといいかな」

「おう、どうした」

家族に対してもジョークなんて言うのは勇気がいるけれど、ゆくゆくはステージの上で知らない人に披露するのだからと自らを奮い立たせる。

「最近俺、ジョークについて研究していき。それであることに気づいたんだ」

うん、我ながら自然に入ることができた。とりあえず練習だ、練習。

「ジョークを成立させるには三人の人間が必要なんだ。ジョークを話す人、それを聞いて笑う人、それを聞いても理解できない人」

一希の目の前にいる道雄は何とも言えない表情をしている。キョトンとした表情という表現が最も当てはまるだろうか。五秒にも十秒にも感じられた沈黙の後、道雄は二階へ向かって大きな声を挙げた。

「おーい、母さん、ちょっと来てくれ」

道雄の突然の大声に、今度は一希がキョトンとしてしまった。

「何だかよく分からないな。でも三人いないといけないんだな。母さんも呼んだからもう一回話してくれ」

「母さん、いいよ、何でもないから」

一希も二階へ向かって大きな声を挙げた。と同時に道雄の様子をもう一度見てみる。いたって真面目な表情だ。一希をからかっているわけでもなさそうである。ジョークとして分かりづらいのが、たまたま一個目だったのかもしれない。他のジョークを試してみよう。

「父さん一人で大丈夫だよ。ところで女性ってのは若く見られたいものらしい。ある女性が役所で年齢を書く書類に二十九歳と七十二ヶ月って書いたんだって」

「俺もたまに何歳か忘れる時あるぞ。でも二十九歳で忘れるっていうのは心配だな、その女性」

あれれ、また予想外の反応だ。かみ合っていないけど、誰かの反応を見るために話す練習をしているわけだから、これはこれでいいのか。それにしても父さんの真剣な表情は何なんだ。今回も俺をからかっているわけではなさそうだ。

「先日、就職採用面接で、ここ二年間で五回の転職をされていますが、あなたは飽きっぽい性格なのですかって質問されたんだ。俺はビシッと答えてやったよ。いいえ、自分から辞めたことは一度もありませんって」

「カズは五回も転職していたのか。三回目までしか把握していないぞ」かみ合わないのは、俺の話し方が下手くそだからなのだろうか。もしくはジョークそのものが分かりづらいのだろうか。どっちに

してもやり始めたんだ、めげずに続けるぞ。

「一週間前たまたま行ったお寿司屋さんが美味しくて、もう一度行ったところ今度はイマイチだったんだ。そこで思い切って板前さんに聞いてみた。このマグロ、先週食べたのと比べると味が落ちますかね。板前さんが言うには、そうですね、先週と同じマグロですよだと」

「気のせいだろ。素人に味の違うなんて分かるわけないさ」

「そのお寿司屋さんの店内がちよっと寒くて、そのことを伝えたら、店の角の席へ移動しますかって提案されたよ。角はほぼ九十度ですだって」

「暑すぎるだろ。いや、九十度は危険じゃないか」

うん、この手の反応にも慣れてきた。

「お金持ちの紳士がホテルへ行き、一番安い部屋を頼んだ。すると支配人が、あなたの息子さんや娘さんは来る度にスイートルームをとっていますよと教えてくれた。紳士は答えた。彼らには金持ちの父親がいるけど、私にはそんな親はいないからこれでもいいと」

「それならホテルじゃなくて、マンガ喫茶に行けばいいのにな。せめてカプセルホテルとか、もっと安いだろ」

「話変わって、イギリス人、フランス人、インド人、の三人がある賭けをした。腐ったチーズを置いた部屋に誰が一番長くいられるかって。一時間後、イギリス人が鼻をつまんで出て来た。三時間後、フランス人がヨロヨロしながら出て来た。十時間後、チー

ズが逃げ出して来た」

「なんだ、四人で賭けをしていたのか。四人集まっていたなら麻雀やれば良かったのに」

「あれ？ 四人になっていたのか、ごめん」

「ところで、チーズって何人だ」

もう完全に道雄のペースになってしまっている。道雄の思考回路に抗うことができなくなってきた。

「そう言えば、ライフルを買ったばかりの友人が、初めて山へ猟をしに行ったところ、野ウサギ三羽かついで帰って来てさ。初めてなのに大収穫だったなと褒めたら、何か気配がして驚いて撃ったら猟師さんだったんだって」

「ウサギより人間の方が当てやすいんだな、大きいし」

「その友人に先日、一万円でテレビを売ったんだ。その後、友人に文句を言われちゃってね。一週間もせずにテレビがつかなくなったって。だから俺は言い返したよ。俺だって、あの時の一万円は一週間もたずになくなったぞって」

「ん、あの五十インチのテレビか。一万円は安過ぎだろ。ところで、つかなくなったのならメーカーに修理依頼すれば良いのになあ」

それにしても無口で真面目そうな父がこんなにも強敵だとは思わなかった。その強敵が穏やかにある提案をしてきた。

「カズが一所懸命話してくれているのは伝わってくるが、俺には何の話なのかよく分からないわ。やはり、母さん呼んで三人になった方がいいんじゃないか」

「いや、いいんだ。これはただの練習だから。父さん、聞いてくれてありがとう」

初めてジョークを試す相手として、道雄はハード過ぎたのかもしれないと、一希は少し苦笑いしながら自宅での初練習を終えた。一希以上に無口な道雄は、周囲の人間から「何を考えているのかよく分からない」と言われてきた。それは息子である一希から見てもそうだった。二十歳になるまでこの家で共に生活してきたはずなのに、道雄とじっくり話した記憶がない。当時、一希がリビングのテレビでバラエティ番組をつけると「何が面白いのか分からない」と言って自身の寝室へ行き本を読んでいた。実際、道雄はニュースとスポーツ以外、テレビを見ることはなかったのではないだろうか。そして、それは再び一緒に生活し始めた最近でも変わっていない。

一週間後の日曜日、一希はR-1用のネタを作るのに集中できる環境としてサンプラザ市原の九階の研修室を予約していた。サンプラザ市原というのは一希が高校三年生のころに出来た実家から最寄りの五井駅に隣接したビルで、この上階からの見晴らしが一希はとても好きだ。高校生になり多少行動範囲は広がったが、おそらく中学を卒業するまではここから見渡せる辺りが一希の世界そのものだった。徒歩圏内の実家は勿論、小学生のとき何かある度に友人たちと集まっていた出津第一河川敷広場、海が見たくなると自転車漕いで行っただけの一人ボートとしていた養老川臨海公園、などを眺めることができた。もっと広い街だと思っていたんだけど……。この街を出てまた戻ってきたので尚更そう思うのかもしれない。

一希は、この一週間も引き続きジョークを作り続けていた。ジョークの数が五十個を超え、明らかに質も上がってきたように感じるのだが、実は引っ掛かっていることがある。

「父さんはこのジョークに対して、何て反応するだろうか」

先日の初練習において、最初の三つ目くらいまでは、おかしな返答をする道雄に困惑していた。が、途中から道雄が何て返してくるのか期待して楽しくなってしまうていた。道雄が一希を笑わそうと狙っているわけでもなく、あくまで真面目に返答している様子が更におかしくて堪_{たま}らなかった。一人で話すよりも道雄のとなちんかなな発言を交えた方が、ネタとしてより面白くなるのではないか。一希がジョークを淀みなく披露する、観客がそのジョークのポイントに気づき静かにニヤツとする、ポイントに気づかない道雄が違う角度からコメントする、そのズレ具合を観客に笑ってもらおうというスタイルの漫才が成立するのではないか。R-1じゃなくてM-1を目指そうか。いやいや、仮に漫才として成立したとしても、あの慎重な性格の父さんが漫才なんてするわけないか。でもそんなこと言ったら俺だって、とてもじゃないがステージに立って話すようなタイプの人間ではないぞ。そんなことを頭の中でぐるぐる考えていた一希は、道雄に初めてジョークを試した一週間前のことを思い出した。そうだ、あの時だって思い切って試したから、こんな考えが広がったのだ。断られたところで何も損はしない。

「父さん、今少し話せる？」

「ああ、どうした」

日曜の一人ランチを終え、帰宅した一希はリビングで寛_{くわ}いでいた道雄に声を掛けた。

「M-1っていう漫才の賞レース知ってる？」

「知らないなあ。まず賞レースって何だ」

「えーと、漫才の面白さを競う大会みたいなのがあるんだ」

そうだよな、興味のあるなしというより、M-1そのものを知らないよな。

「そのM-1に俺と父さんの二人で参加しようよ」

「は？ 参加ってのは、俺とカズで漫才をするということか」

「うん」

「何で俺とやりたいんだ。誰か同世代の友人の方がやりやすいだろう」

「先週、色々なジョークを話した時の父さんの返答がとても面白かったからだよ。そして、その面白さは世代が違う二人だからこそ、より増していると感じたんだ。ネタは全部俺が考えるから、一緒に漫才をやってみないか」

「ネタって何だ」

「漫才の元になる台本のようなものかな」

「カズが作った台本通りにやりとりすれば良いってことか。自信はないけど、いいぞ。やってみるか」

「え、いいの」

引き受けるわけないと九十パーセント以上思っていたので、了承の言葉を聞いた時、すぐには信じられなかった。

「面白いなんて他人に言われたのが初めてでな。必要とされるならやってみるかって気になったんだ」

「父さん、ありがとう」

「ところで、カズはいつから漫才をやるうなんて思っていたんだ」

一希は、R-1を指そうと思った経緯、ジョークを作ったこと、そのジョークを元に漫才をしたいこと、M-1の概要説明、などを大雑把に話した。

「カズはあまり自分から話さないから、そんなことを考えているなんて全く知らなかったぞ」

おいおい、自分から話さないのはそっちの方だろ。うーむ、お互いについてことなのかな。そんなことよりこれからのことだ。M-1の一回戦が始まるまで三ヶ月を切っている。この日以降、二人は漫才コンビとしての日々を過ごすことになった。

一希は急ピッチでストックしていたジョークを漫才用にアレンジした。今まで自分が一人で話す場面を想像しながらネタを考えてきた一希にとって、この作業は非常に面白かった。自分と道雄がやりとりする場面を想像するとリズムのようなものが生まれて文面に起こしやすいのだ。すぐに二分用のネタが出来た。更に勝ち抜いた時のために三分用のネタも作った。ネタが二つ出来上がったことに安堵はしたが、これでようやくスタートラインなのだ。このネタ通りに大人しい俺が話せるものだろうか。そして俺以上にクソ真面目な父さんが一緒に話して知らない人達を笑わせられるのだろうか。

出来上がったネタをプリントアウトし、二人の練習が始まった。まずは台本の通りに自然にやりとりできるようにすること。次に台本なしでやりとりできるようにすること。時折、練習の様子を一希のスマホで録画して二人でチェックし合った。こんな時、住んでいる所が一緒というのはとても効率が良い。土日なんて殆ど一緒に過ごしているわけだし、平日の夕飯後のちょっとした時間も練習に充てることが出来た。ところで道雄と漫才の練習という行動を重ねているうちに一希が驚いたことがある。不器用だと思っていた道雄が日々上手になっている。その理由を聞いてみたところ、過去のM-1決勝進出者のネタ動画を十年分見て自分なりに勉強したとのことだった。そうだ親子とはいえコンビとなつたからには俺も負けないように頑張らねば。コメディに関して何の知識もない二人だったが、意見を出し合いネタを更にブラッシュアップしていった。

道雄と一希が親子よりも相方としての時間を多く持つようになっていく中、同じ屋根の下にいるもう一人の家族である晴恵が夕食を終えたタイミングで、一希に厳かに話しかけてきた。

「カズ、これお守り。漫才の大会に出るんでしょ」

「え、いいよ、そんな」

（そんな大袈裟なことじゃないのに…）

「いいじゃないよ。父さんにはもう渡しちゃったし。はい、これはカズの分だから」

半ば強引に握らされた手を開き、お守りを見た一希はやや大き

な声を挙げる。

「立國寺りつこくじに行ってきたの？」

「精一杯やってね」

一希の反応に晴恵は満足そうな表情を浮かべながら台所へ立ち去った。立國寺とは平安時代末期に源頼朝が再起を祈願したお寺で別名出世観音とも呼ばれている。我が渡辺家では「ここ一番」の際にはこのお寺にお参りしてきた。一希の高校入試の時も、大学入試の時も。最初は、わざわざ用意されたお守りを照れくさく思った一希だったが、晴恵が家族の一大イベントのように気にしてくれていると感じて大いに励まされた。

M-1本番まであと二週間となった。日々の練習の成果もあり、二人の漫才も少しは様になってきた。そして様になってきたからこそ更なる不安が生じる。人前で練習通りに話すことができるのだろうか。一希は自分が引っ込み思案な性格であることを痛いほど把握している。そして、その一希から見て道雄も自分と同じタイプと思われた。本番前に似たような体験をしておきたい。一希は、近所にある曼茶羅まんだらというレストランに目を付けた。このレストランは、不定期にバンドが生演奏をするライブハウスとしての顔を持っていた。電話で問合せたところ、週末にジャズのライブがあるとのことだったので、最初の二分間に飛び入りで漫才をさせてもらえないか交渉してみた。我ながら突然すぎる提案とも思ったが、「どうせセッティングに時間かかるから二分程度なら」とOKの返事をいただけた。大喜びで道雄に報告し、当日意気込

んで曼茶羅に乗り込んだ二人だったが、緊張のあまりお粗末な初舞台となってしまった。自分たちの現在の實力の低さを分かってはいたものの一丁前に一希は落ち込んでしまった。

「今日は二十二二人いたな」

「え、そうだった？」

帰宅してリビングでお茶を飲んで一息ついている時に、道雄が声をかけてきた。父さんは観客の人数を数える余裕があったのか。「本番の会場は百二十五席あるらしい。今日より凄いいんだろうな」「そうだね。今日の反省を次に必ず活かそう」

強引に相方に任命したはずの道雄の冷静な発言に、一希は前向きにさせられた。お陰で本番までの残り一週間に有意義に過ごすことができた。

M-1一回戦の朝、一希はやはり緊張していた。成人してから仕事以外のことでこんなに時間と労力を費やしたことはなかった。これは、一希が緊張するくらい準備してきたとも言え換えられる。道雄を見ると、いつもと変わらぬ様子で朝食後にコーヒーを飲んでいる。

「父さん、一時間後くらいに出発するよ」

「おう、分かった」

この人は緊張などしないのだろうか。やはり何を考えているのかわからない。まあいいや、今は漫才のことに集中しよう。諸々準備しているうちにすぐ出かける時間となった。二人は自宅から最寄りのJR五井駅まで歩き、内房線という電車に乗った。一回

戦会場のある渋谷駅までは、新橋で銀座線に乗り換えて合計一時間三十分くらいだ。

本日の二人の服装は黒い革靴、黒いパンツ、白い長袖のワイシャツで統一している。コンビの平均年齢が高いため清潔感のある雰囲気にしようと一希が提案したのだ。ところで周囲の人たちには一希と道雄の二人はどういう関係に見えているのだろうか。親子に見えるかな、やつぱり。そりやそうだよな、年齢的に友達同士には見えないよな。ましてや漫才コンビなんて想像もできないだろうな。

それはそうと、電車内での親子二人きりというシチュエーションが結構つらいことに暫くしてから気づく。何を話していいかわからないのだ。家ならばテレビをつけたら、他の部屋へ行ったり、おしゃべりな晴恵を介して三人で話したり、何とでもできるのだが。道雄は電車に乗ってからずっとネタの書いてあるノートを読んでいる。一希と二人きりだからといっていつもと変わった様子は全くないようだ。一希があれこれ考えているうちに電車は新橋駅に着き、二人は銀座線へと乗り換えた。

「あのさ、俺が漫才やろうって言った時、断ろうとは思わなかったの」

まだ続く電車内での気まずい沈黙を打ち破ろうと、一希はずっと気になっていたことを質問してみた。

「ん？ 思わなかったな」

「でも父さんは、話したりするのが得意ってわけでもないだろうに」「そうだな。得意じゃないな」

「実は、お笑いに興味あったとか」

「お笑い系のテレビ番組は殆ど見たことないし、芸人も誰が誰やら分からないし、興味はないよ」

「そうだよな。誘ってはみたものの、断られると思っていたよ、最初」

「あの時言ったかもしれないけど、面白って言われたのが嬉しくてな」

そうなんだ。お笑いの基本を全く知らないからこそその面白さを父に感じたんだ。本人がそのことを全く意識していない点が更に良くて。

「それから、カズに何か頼まれたのも嬉しかったかな」

意外と父親っぽいこと言うじゃないか。

「カズが小学生とか中学生の頃は、自分の仕事のことに精一杯で、学校行事とか部活の応援とか行ったことなかったと思うんだ」

部活の応援って、俺が何部だったかさ知らないだろ、たぶん。「でも、漫才やるってなってから大変じゃなかったかい。ネタを覚えたり、二人で練習したり、ライブハウスに出たり」

漫才やるのを引き受けてくれたことは勿論だが、その後の三ヶ月間、一緒に取り組んでくれたことにより驚いているし感謝している。

「お前、離婚しちゃっただろ。あー、子どもたちと自由に会えないのかあって思ったら不憫ふびんだな」

何だよ。突然ナイーブな部分をほじくってくるなあ。

「でも、自由に会えていた俺は子どもと何かしたことあったのか

なあって振り返ってみたけど特になくて。その何かが、この年齢になってたまたま漫才になっただけかな」

へえ、そんなこと考えていたんだ。一希は照れくさくなって窓の外に視線を逸らした。ちょうど外苑前駅に着くところだった。

「父さん、あと二駅で渋谷だよ」

一希は思い出したようにリュックからお揃いのネクタイを二本取り出した。

「そうそう、オリジナルネクタイを作っておいたよ。会場に入ったら、これをつけよう」

そう言って鮮やかなゴールドイエローのネクタイを道雄に一本手渡した。無地ながら白い文字で大きく「渡辺家」とプリントされている。

「ほう、わざわざ作ったのか」

父は、当然のようにそのネクタイを首に締め始めた。

「いや、会場に着いてからでいいよ。電車の中は人がたくさんいて恥ずかしいでしょ」

「恥ずかしい？お前、何言ってるんだ。これから人を笑わせるんだろ」

その通りだ。恥ずかしがっている自分が恥ずかしくなった。リュックに戻しかけていたネクタイを一希もそのまま首に締めた。今、銀座線の車内で、七十五歳と四十八歳の親子がお揃いのネクタイをして行儀よく隣同士に座っている。しかもそのネクタイには自分たちの苗字がプリントされている。目の前の座席に座っていた若いカップルがこちらを見て微笑んでいる。

「幸先いいぞ。ネタをやる前からウケてるじゃないか」

目の前のカップルの反応に気づいた道雄が小声で呟く。実は一希も今、同じことを思っていた。

了